

10) 早期胃癌に対する Surgical Gastric Mucosal Resection (SGMR) の試み

佐藤 好信・福田 稔 (県立坂町病院外科)
鈴木 雄・渡辺 俊明 (同 内科)

多田らにより strip biopsy が開発されて以来, 早期胃癌に対する内視鏡治療 (EGMR) が盛んになってきている。われわれは今回過去3年間の早期胃癌の検討から, 明らかにm 癌と思われるIIa 症例で EGMR 困難な症例また EGMR 後の遺残症例に対し外科的胃粘膜切除 (SGMR) を試みたので報告する。当科における過去3年間の早期胃癌症例は48例で m 癌34例 sm 癌14例であった。このなかでリンパ節転移を認めたものは sm 癌症例3例のみであった。この結果と諸施設の EGMR の適応基準を参考にし今回4例のIIa 症例に限定して SGMR を施行した。1例は EGMR 不成功例, 1例は EGMR 施行遺残症例, 2例は EGMR 未施行例であった。術前日に胃内視鏡にて病変部に印をつけ, 胃切開の後 free margin を最低 5 mm は切除するように心がけた。3症例は m, ly0, v0 であり, 遺残症例であった1例は切除標本に癌を認めなかった。この他本術式の問題点や胃切除, EGMR との比較についても検討する。

11) 当科における食道と他臓器重複癌症例の検討

三科 武・鈴木 伸男
齊藤 博・加藤 知邦 (鶴岡市立荘内病院)
近藤 公男・松井 俊明 (外科)
石原 良・内野 英明 (同 胸部外科)

近年術前診断精度の上昇とともに食道癌の早期例が増加し, 同時に他臓器との重複癌症例も多くみられるようになった。今回食道と他臓器の重複癌手術症例について検討した。1980年1月より1992年2月まで当科において手術が施行された食道癌手術例数は84例であり, 食道と他臓器の重複癌症例は同時性重複癌10例, 異時性重複癌3例で, 全例男性であった。同時性重複癌では胃癌6例, 直腸癌2例, 腎癌1例, 膵癌1例であり, 異時性重複癌では全例他臓器癌が先行しており胃癌が2例, 咽頭癌が1例であった。重複癌発見の動機をみると同時性重複癌では他臓器癌の症状の見られなかった例が10例中8例もあり術前の精査が必要と思われた。治癒切除例の生存率は食道癌のみでは5年生存率は65.5%で同時性重複癌では2年6月で47.6%, 異時性重複癌では1年7月で50%であり, 各群間に有意差はみられなかった。重複癌例でも治癒切除例では食道癌のみの例と差はみられ

ず積極的な治療が必要と思われた。

12) 胃癌術後成績向上に対する拡大郭清の効果

佐々木壽英・加藤 清
佐野 宗明・梨本 篤 (県立がんセンター)
筒井 光廣 (新潟病院外科)

胃癌術後生存率向上に関して, リンパ節拡大郭清の面から検討した。1990年までの25年間に当科での切除胃癌3695例(他病死除外)を5年間隔で比較した。その結果, pm 癌と se 癌, Stage II と Stage III で5生率の上昇を認めた。pm 癌と Stage II の5生率上昇は pm 癌のより早期発見効果によるものである。

当科で本格的に R3 と大動脈周囲リンパ節の郭清を開始したのは1981年以降である。その結果, 3群・4群転移陽性で相対非治癒切除例の5生率は23.3%・20.6%であり, 拡大郭清の直接効果が認められた。

一方, n2 (+) 症例を, R2 郭清にとどめたA群と3・4群リンパ節を郭清し3・4群には組織学的に転移陰性であったB群に分けて5生率を比較した。その結果, B群の生存率は45.3%と有意に良好であった。これは n2 (+) 治癒切除例に対する拡大郭清の間接効果であり, この間接効果が se 癌と Stage III の5生率上昇に貢献したものと考えている。

13) びまん浸潤型大腸癌の2手術例

鹿嶋 雄治・佐藤謙一郎
師岡 長・牛山 信 (秋田組合総合病院)
平原 浩幸・安井 應紀 (外科)
石川 浩一 (石川病院)

過去6カ月間に大腸癌ではきわめて希なびまん浸潤型癌を2例経験したので報告する。症例1は67才, 症例2は78才の男性でいずれも消化管の通過障害を主訴として診断された。症例1は局在 T, S₃N₄P₃H₀, 症例2は局在 Rb, AiN₄P₀H₀ でいずれも Stage V で非治癒切除であった。組織型は症例1は低分化腺癌, 症例2は中分化腺癌であった。びまん浸潤型大腸癌は手術時にすでに高度進展した症例が多く予後不良とされるが, 予後向上のためには, 病変の初期像の観察, 癌の生物学的特性の解明が必要と思われる。